
ロックマンX?IS 《インフィニット・ストラトス》

キンケドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロックマンX?IS 《インフィニット・ストラトス》

【Nコード】

N4665Z

【作者名】

キンケドゥ

【あらすじ】

20XX年……世界にはISという女性にしか動かせない兵器が開発され、女尊男卑の世界となっていた。そんな最中、男性でISが使える少年が現れた。少年の名は『織斑一夏』。ブリュンヒルデの異名を持つ女性の弟だ。が、しかし、ISを使える男性はもう1人いた。その少年の名は『黒須孝宏』。ロボットの父と呼ばれた『トーマス・ライト』を親に持ち、謎のIS『X』を操る者。少年は苦悩しながら世界に迫る黒い影に仲間と共に立ち向かう……

この二次創作はISとロックマンXのクロスオーバーです

プロローグ（前書き）

息抜きに書いたものを投稿してみました！

『第二の人生はISの世界で！？』よりも不定期更新になりそうです。

尚、今作のヒロインはアンケートを取りたいと思います。ご協力、お願いいたします。

選択肢は後書きに

プロローグ

俺には、尊敬する爺ちゃんが居た。まあ、爺ちゃんとは言っても、俺は物心ついた時から孤児で、そんな俺を育ててくれたのが今の爺ちゃんだから、俺とは血が繋がっていないが。…取り敢えず、それは置いてだ、爺ちゃんは有名な科学者だった。爺ちゃんはロボットについて研究していて、俺はそんな爺ちゃんの研究している姿を見るのが好きだった。

でも、中2のある日、爺ちゃんは老衰死した。形見として残ったのは、死ぬ数日前に爺ちゃんが渡してくれた、青いクリスタルの付いたペンダントだった。爺ちゃんがこれを渡してくれた時、肌身離さず持っているという言葉通り、常に身につけている。

里親を無くした俺は新たな里親を探すかと聞かれたが、断った。爺ちゃんが残してくれた遺産で中学校生活は切り抜けられそうだし、高校に入らずに働けばなんとかなると考えたからだ。何より、新しい里親と暮らしたら爺ちゃんとの絆が無くなってしまいう気がした。

そして、受験シーズンを終え、卒業ムードになった学校では『男で初めてISを動かした』ことで有名な隣のクラスの織斑一夏の話で持ちきりだった。ISというのは略称で正式名称は『インフィニット・ストラトス』。女性にしか動かせない上、現存する兵器の中では最強の兵器だ。おかげで今や世界は『女尊男卑』の世の中になってしまった。…まあ、今は危険過ぎるって理由でスポーツになつてほしい。ちなみに、爺ちゃんもこのISの研究もしていたみたいだ。

で、そんなISを動かせた男子ときたら絶対に話題になるわけだし、しかも、そこそこのイケメンなので女子はキヤーキヤー言ってるし、男子は男子で、『女子校のIS学園に行けるなんて…』しかも、イケ

メンだと？リア充は死ぬ！』というような話声が聞こえる。まあ、俺には関係のない話だな。

織斑一夏のことについてだが、先述した通り外見はイケメンで、話してみるといい奴だったな。話したことがあるって言っても、小2と中1の頃に同じクラスになった時だけで、今は知らない。

そして、その日の放課後。俺はいつも通り友達と寄り道しながら帰る途中のことだった。

「じゃあな〜孝宏」

「ああ、さよなら」

いつも通り同じ場所で別れる。そして、爺ちゃんの研究所に入るための森の中へ入っていくと……。

ドカアアアアン！！！！

後ろから轟音が聞こえた。振り向くと巨大なロボットがいた。クモのように四足で立って、顔？の下にはショベルのようなアームがついていた。そしてそのロボットはこちらに気づいて、近付いてきた。

「ちよっ……！なんで、なんでこっちにくるんだよ！チクショウ！」

俺は慌ててロボットと反対側に走り出す。誰かに助けを求めようとするが、最悪なことにはここは森の中なので人が殆どいないのだ。さっきの衝撃で生じた煙で誰かが気付けばいいけど……。しかし、どうする？このまま街に向かう訳にはいかない……。

「のわっ！？」

考え事をしながら走っていると、地面から突き出た根っこにつまづき、転んでしまった。そうこうしてるうちにロボットは迫ってくる。

「……ッ！」

そして、ロボットは前脚を上げる。そして、俺に向けてその前脚が振り下ろされる。その時、爺ちゃんの形見の青いクリスタルが光を放った。

「……クス…… エックス…… エックス……」

「……あな…… た…… は？」

「わしはトーマス・ライト。お前の生みの親だよ、エックス」

「エックス…… それがワタ…… シノ…… ナ…… マ…… エ……」

「エックス…… そう、無限の可能性を意味する名前だ。お前は自分で考え、行動する新しいロボットになるんだよ……」

気が付くと俺は見知らぬ天井を見ていた。

「……ここは？」

「気が付いたようだな。ここはIS学園だ」

俺の不意に呟いた疑問に近くにいた女性が答えてくれた。その女性は黒いスーツに黒い髪が特徴的だった。

「IS…… 学園……」

「そうだ。起きて早速で悪いが、質問させてもらっぞ。お前の名前は？」

「黒須、孝宏」

「では、黒須、お前は何故あの場所にいた？」

「あの場所とは？」

「町の森だ」

「……いつも通り、森の中にある家に向かっていました。そしたらいきなり後ろから轟音が聞こえて、振り返ったらロボットがいたんです。俺は必死にそのロボットから逃げました。でも、途中の木の根が出っ張ってることに気付かなくてそのまま転んで倒れて、そしてロボットが俺に前脚を振り下ろそうとしたところで俺のペンダントが……あれ？俺の、俺のペンダントは！？」

「ああ、あれは一時的にこちらで預らせてもらっている。安心しろ、盗んだりはしない」

「……そうですか」

「それで？その――織斑先生！」

黒いスーツの女性を織斑先生と呼んだ人はドアの近くに立っていた。その女性は緑色の髪と豊満な胸が特徴だった。

「あのペンダントの解析が終了しました。やはりあのペンダントはISの待機状態のようです」

「え！？爺ちゃんの形見が！？」

「やはりか……黒須、お前はやはりISを起動させ、あのロボットを壊したようだな」

「でも、俺の記憶にはそんなことは……！」

「だが、あの場にお前以外居なかった上、誰かが居た痕跡もない。ならば、お前がISを起動させて、あのロボットを破壊したと考えるのが自然だろう？」

「ッ！」

確かにこの人の言う通りだ。あの森に近づく人なんて俺くらいだ。それに俺がやった確信が無いとはいえ、あの状況を打開するにはISのような強大な力が必要だったはず。なら、あの気を失う直前に見たペンダントの光。あれはISが起動した光なのか？でも、ISは女性にしか使えないはず……。

「……なら、本当に俺がISが起動させたのか試させて下さい」「構わん。こちらもお前が起動出来るという確信はないから元よりやらせるつもりだったしな。しかし、ここでは狭すぎる。ついて来い」

俺は緑髪の女性からペンダントを返してもらい、ベツトから降りる。そして、黒髪の女性について行き、何やら校庭のような場所に出る。

「よし、起動してみせろ」

「でも、俺は起動の仕方なんて知りません」

「…そうだな、鎧を纏うイメージを試してみろ」

（鎧を……纏う……）

ペンダントを握りながらイメージをするとペンダントは光を放ち、俺を包み込む。光が収まると俺は青い鎧を纏っていた。

「……驚いたな。二人目が居るとは」

「お、織斑先生、これはビツクニースですよ!？」

「ああ、わかっている。黒須」

「は、はい!」

「お前にはIS学園に入ってもらうぞ。ISを起動出来たのだからな」

「え、ちょっ、待って下さい!俺はそんなの嫌ですよ!」

「拒否権はない……訳ではないが、お前はISを起動出来た。これがバレればお前を狙う輩が出てくるだろう。それに、あのロボットがお前を狙ったというのも気がかりだ。だから学園でお前を保護しようと言っただけ」

「……………」

「それに、調べたところ黒須君は孤児ですし……命を狙われながら1人暮らしというのは大変危険だと思うのですが……」

「それは……そうですね」

「まあ、悩め。その上で決めろ。どうしてもお前がこの学園に来るのが嫌なら出て行けばいい。ただ、その場合、お前には24時間態勢でボディガードが付くことになるだろうがな」

「……わかりました。この学園に入学しますよ……どちらかを選ぶならここにいた方が安全みたいです」

「フツ……賢明な判断だ。では、明日入試テストを行う」

「え！？ちよつ、強制入学じゃなかったんですか！？」

「安心しろ、これに落ちても合格出来る。まあ、簡単に言えば見せ試合だ」

「はあ……ところで、俺はあなたたちの名前を知らないんですけど」

「ああ、自己紹介が遅れたな。私は織斑千冬。ここ、IS学園で教師をやっている」

「私は山田真耶です。同じく教師をやっています。よろしくお願いしますね！」

こうして、俺はIS学園に入学するハメになった。

ブローグ（後書き）

……そこまで人気無い癖になにやってるんでしょうね！俺！…… 0
r z

アンケートの選択肢です

1 ・更織楯無

2 ・更織簪

3 ・その他（ヒロインにしたいキャラを明記して下さい）

4 ・ヒロインはイラネ

Stage・1 入試テスト（前書き）

懲りずに一話目です。

アンケートの期限を書いていなかったので一応期限は5話投稿までに決めておきます。

……でも肝心のアンケートが「煤けた中二病」さんの一件しかきてない……

Stage・1 入試テスト

「はあ……」

今、黒須はIS学園の寮のとある個室のベッドで寝転んでいる。理由は今ひとりにすると命を狙われる危険があるため、学園が保護し、安全を確保するためらしい。そして、明日行われる入試テストをすぐ受けるためということでもある。

黒須はベッドから降りて、自分のISである『X』のデータを改めて見てみる。武装はバスターのみ。ここはまだ許容できる範囲だ。だが、許容出来ない点がひとつあった。それはISとしての最もな欠点、空が飛べないということだ。

普通のISはPICバックシフ・イナーシャル・キャンセラーという基本システムにより、浮遊・加減速を行うのだが…この『X』には原因不明の故障で浮遊機能が失われているのだ。

だが、『X』には代わりに付いているダッシュという機能がある。

これはシールドエネルギーを消費せずに高速移動が出来るというものだ。ISには瞬間加速イクニッション・ブーストと呼ばれる加速手段があり、ダッシュはこの加速手段より遅いが、使い方次第ではシールドエネルギーを消費する、瞬間加速よりも便利な機能になり得る優れた機能なのである。

（爺ちゃん……なんで故障させたんだろ……爺ちゃんならこんなミスしないはずなのに……でも、このダッシュって機能……かなり使えるかも……）

そして、『X』のもう一つの特徴。アーマー機能。これはISのパッケージや専用機のオートクチュールに似たもので、『X』を大幅に強化する代物である。だが、ISと少し違う点がある。それは容量を使用しないということ。通常、ISがパッケージやオートクチ

ユールをインストールする際、拡張領域パススロットと呼ばれる容量が必要なのだが、『X』にはその必要が無く強化が行える。だが、このアーマ―機能は『X』の潜在能力を引き出すためだけであり、決して武装が追加される訳ではない。そのため、近距離対策等に備えるためには後付装備イコライザを付けなければならないのだ。

現在、アーマーは倉持技研という研究所で『X』の中にあつたアーマーデータの復元を試みているそうだ。

「……とまあ、『X』の機能は一通り見たけど……欠陥部分が結構あるな……アーマーで変わるのか？……わからないな……とりあえず、寝よ……」

黒須はコンソールを閉じて、ベッドの中に潜った。

黒須はベッドに潜りこんだ後、すぐに寝てしまった。理由としては家にあるベッドよりふかふかで心地がよかったからだ。

とりあえず、ベッドのしわを直し、元の状態にする。その後、キッチンで簡単な朝食を作って食べる。ちなみに食材は山田さんと織斑さんがくれた。料理の腕前はそこそだと自負している。何故なら爺ちゃんは研究ばかりでご飯をほとんど作れなかったので、引き取ってもらってから一生懸命練習し続けたからだ。

朝食を終え、テストが始まる9時まで部屋で待機する。

9時になると、ドアからコンコンとノックの音がした。

「はい？」

「あ、山田です。黒須くん、試験を行うので出てきてもらえませんか？」

「わかりました。すぐ行きます」

ドアを開けるとスク水に近い山田先生が立っていた。

「山田さん……その格好は？」

「え？ああ、黒須くんは見るのが始めてでしたか。これはＩＳスーツと呼ばれ、簡単に言うＩＳとの動きをよくするんです。後で黒須くんにも着てもらいますから」

「は、はあ……」

正直、黒須は嫌だった。何せ、明らかに女子の旧スク水だったからだ。こんなのを男の自分が着ると考えると……。

「……オエ」

「ど、どうしたんですか！？」

「い、いえ……自分がそんな旧スク水みたいな服を着ると考えたら……気持ち悪くなってしまった……」

「ああ、それなら問題無いですよ。黒須くんには男性用に作られた特別なＩＳスーツを用意してあるので」

「そ、そうなんですか……ありがとうございます……」

「お礼を言われても……初の男性ＩＳ操縦者が出てきてすぐに開発されましたので……」

「あっ……」

織斑がＩＳ操縦者って分かってからすぐに開発されたということが分かり、少し恥ずかしくなってしまう。なんで自分のために、なんて考えてしまったのか、自問自答を始めそうになるが、山田先生の声が聞こえて中断する。

「あっ！もうこんな時間！急いで下さい！」

「は、はいっ！」

現在、黒須は第三アリーナと呼ばれるスタジアムのカタパルトにいた。黒須は慣れないISスーツをずっと気にしていた。どうも水着の様にピチピチなのが気になるのだ。

「では、黒須。お前にはこの打鉄うちがねを使ってもらう。『X』はどうやら欠陥機のような。まあ、ISに欠陥機も何も無いのだが」
「はあ…で、どうすれば？」

「そこに座るようにしていれば後はシステムが最適化してくれる」
言われた通りに打鉄うちがねの腕、足に四肢を入れていく。だが、打鉄は何の反応も示さない。

「……………」
「機体が…動かない？ちよつと待て」

何やら織斑さんはパソコンに向かい操作を始める。そして、数秒後、顔が面倒臭そうな顔になる。

「黒須、非常に言いにくいことなのだが……ISはお前に反応していない」

「はあ！？ちよつ、どういう事ですか！？」

「恐らく、お前の持つ『X』だけがお前に反応するISなのだろう。だからすまないが、今回のテストや入学後も『X』を使ってもらうことになる」

「……構いませんよ。俺にとって『X』は最強のISだと思ってますから。それに、爺ちゃんの作ったISで勝負したかったですね」
「そう言ってもらえると助かる。だが、時間も押しているから急い

でももらえるか？」

「了解です」

黒須はペンダントを握り、鎧を纏う感覚を思い浮かべる。すると黒須の体は光に包まれ、青い機械の鎧を纏う。

「それじゃ！行ってきます！」

「ああ、頑張れよ」

黒須はカタパルトを使わず、ダッシュを使ってアリーナに躍り出た。

「あれ？黒須くん、打鉄うちがねじゃないんですか？」

アリーナに出ると『ラファール・リヴァイヴ』を装備した山田さんが待機していた。

「ええ、どうやら俺に反応するISは『X』これだけみたいです」

「そうなんですか……でも、だからといって手加減はしませんよ！」

山田さんは両手にアサルトライフルを呼び出す。

「望むところです！」

黒須もそれに応えるように自分の右腕をバスターに変形させる。

ふたりが構えると試合開始のブザーが鳴る。

ブザーが聞こえると同時に山田さんは右手のアサルトライフルの引き金を引く。黒須はそれを避けるために右側にダッシュで緊急回避を行う。だが、それを当然の如く予想していた山田さんは左手のアサルトライフルでダッシュの予測コースに弾幕を張った。黒須はそれをモロに喰らってしまい、シールドエネルギーを消費する。

ーバリアー貫通、ダメージ66。シールドエネルギー残量534。

（ぐっ……やはり相手は戦い慣れてる！なら！）

何とかダッシュを使い続け弾幕を抜け出す黒須。山田さんは弾が切れたのか、右手のアサルトライフルを捨て、新たに装備を呼び出す。左手のアサルトライフルで弾幕を張りながら行っている動作だが、僅かに隙が出来た。その隙をたまたま見逃さなかった黒須をダッシュで弾幕を避けつつバスターを放つ。そして何発か山田さんを直撃し、僅かにシールドエネルギーを減らす。ダメージを受けた山田さんは上昇し、一時体制を立て直す。だが、『X』の武装『Xバスター』の最大の特徴が無限に放つことが出来るという点を活かし、黒須は追撃し続ける。飛ぶことが出来ない黒須にとつて、上昇されたら圧倒的に不利なので攻撃をやめるわけにはいかないのだ。しかし、黒須の努力も虚しく、放ったエネルギー弾はすべて避けられ、オマケに先程呼び出したと思われるグレネードランチャーの雨を浴びせられている。グレネードの爆風や、その余波で勢いよく飛んできた石などによってシールドエネルギーは削られる。

（ちい…やっぱり空に上がられたらお終いなのかよ！）

黒須が諦めかけたその時、目の前に映る空間モニター、ハイパーセンサーに壁蹴りという能力の解説がでる。これは壁を蹴って高いところまでいけるようになる機能らしい。

（ええい！ままよ！）

黒須は壁にダッシュしながらジャンプして、壁に張り付く。ズルズルと落ちていくが、壁を蹴り、上へ上へと登っていく。途中、何も

無くて驚いたが、アリーナに張ってあるバリアが壁となり、壁を蹴り続けることが出来た。バスターのチャージをし、山田さんの攻撃を避けつつ登り続け、山田さんより高い高さまで登る。そして、山田さんに向かって飛び、照準を合わせ、チャージし続けたバスターのエネルギーを開放する。

「うおおおおああああ!!」

あまりの反動に体が吹き飛ばされる。勢いよく壁に向かって吹き飛ばが、受身をとって壁をつたってゆつくりと降りていく。ハイパーセンサーで山田さんを見ると、フルチャージショットをモ口に喰らったように両手の武器を放し、落下を始めたが、地上から10m程離れたところで一回転し、体制を立て直す。ハイパーセンサーに表示されたお互いのエネルギーを見ると、黒須が294、山田さんが146と黒須が圧倒的有利だった。だが、黒須が有利とはいえ、山田さんのほうが攻撃を当てている回数が多いため、このまま逆転される可能性もあった。

「やりますね……黒須くん……」

「山田さんこそ、流石ですよ……」

「……ハアッ!」

今度は近接ブレードを展開し、間合いを詰めてくる山田さん。こちらは近距離武装が無いため、バスターで迎撃する。が、それを軽々と避け、一太刀、二太刀と確実に攻撃を黒須に浴びせる山田さん。おかげで、さっきまで有利だった黒須のシールドエネルギーは136とかなり削られた。黒須は最後の太刀で吹き飛ばされたのを利用し、距離を開ける。そして、バスターをチャージをする。山田さんは右手に再度アサルトライフルを持ち、左手には近接ブレードを持ちながら距離を詰める。右手のアサルトライフルで弾幕を張りな

がら距離を詰めることによって逃げ道を無くそうとするが、黒須は逃げようとせず、最小限の動きで躲す。そして、山田さんが自分の目の前に来た瞬間に山田さんの懷に飛び込み、フルチャージバスターを放った。

そして、バスターが当たるとブザーが鳴った。

『試合終了。勝者、黒須孝宏』

結果は黒須の勝利だった。

「いやあ、まさか最後に懷に飛び込んで来るとは思いませんでしたよ、黒須くん」

「あれは半分賭けだったんですよ。やられるなら自分から突っ込んで！と思って…」

「フツ……あの判断は面白かったぞ、黒須」

「織斑さん……」

「織斑先生と呼べ、山田のことな。一週間後にはお前はIS学園の生徒なのだからな」

「はいっ！」

「あ、これ、IS学園の参考書です。入学前までに読んでおいて下さいね！」

そう言って渡されたのは電話帳程の分厚さを持った参考書だった。

「これを……一週間で!？」

「ああ、そうだ。基礎的な部分だけでも覚えておかんと初日の授業からつまずくぞ？」

「は、はい……わかりました」

「あ、IS学園は全寮制なので、入学後も今泊まっている部屋を利用してもらいますので、よろしく願います」

「わ、わかりました」

どこかの暗い地下。邪悪な雰囲気が漂っていた。そして、そこには人の影のようなものがあつた。

「クックククッ……まさか、この世界で貴様の姿を見ようとはな……
…待っている、今こそ前の世界での屈辱、晴らさせてもらうぞ！エ
ックスウウウウー！！」

Stage・1 入試テスト（後書き）

ロックマンXファンならすぐ分かる人の登場でした。

それではご感想やご意見、そしてアンケートのご協力、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4665z/>

ロックマンX?IS 《インフィニット・ストラトス》

2011年12月20日22時54分発行